

1. 単元名 説得力をもたせる ～筆者の工夫を探ろう～
2. 目 標
 - (1) 文章の構成や展開の仕方に興味をもち、書き手の意図や工夫を考えながら文章を読もうとする。 【関心・意欲・態度】
 - (2) 書き手の論の進め方や説得力をもたせるための工夫を理解し、自分の表現に役立てることができる。 【読むこと イ】
 - (3) 相手や目的に応じて文章の展開に違いがあることに気付くことができる。 【言語事項 エ】
3. 身に付けたい力 目的に応じて構成を理解したり、筆者の表現意図を解釈したりする力
(「読解力向上プログラム」重点目標① ア テキストを理解・評価しながら読む力を高めること
(ア) 目的に応じて理解し、解釈する能力の育成 から)
4. 生徒と単元
 - (1) 生徒について
4月に実施した「標準学力調査」では、国語の総合正答率が77.9%で、期待正答率をいくらか上回ったが、問題ごとに正答率を見ていけば、「文章の展開に即して内容をとらえること」「文脈の中での語句の意味を正確にとらえ理解すること」「場面の展開を押さえて読むこと」の定着度をはかる問題で、期待正答率を下回った。このことから、生徒には説明的な文章の「読むこと」の領域にかかわった問題を苦手にする傾向がある、ととらえている。
説明的な文章に関しては、昨年度、共通する情報を含む二つの文章を比較することから、文章の展開に即して内容を把握し、その構成や展開をとらえることを目的に、「わかりやすく伝えよう」という単元を学習した。学習後、段落の役割に注目して文章を読もうとする意識は芽生えたが、そこに取り上げられた事柄を書き手の文章構成の工夫や表現意図と関連付けて説明できるまでには至らなかった。
そこで今年度は、「文化を伝えるチンパンジー」という説明的な文章の学習の際に、問題提起や実験内容・実験結果、結論がどのような位置付けにあり、どのように組み立てられているのか、説得力をもった文章にするためにどのような配慮がなされているのか、といったことを考える活動を行った。また、7月には、「説明的な文章の魅力」という単元で、八つに分けた段落の順序について話し合い、全体の構成をとらえようとする学習活動を行った。この二つの学習を通して、生徒は、書き手が主張に説得力をもたせるように文章全体を構成していることを理解し、そういう視点で説明的な文章を読む大切さも実感した。ただ、段落相互の関係を俯瞰して文章全体を解釈したり、表現効果と関係付けて主題や主張、書き手の意図を読み取ったりする技能の習得は充分とは言えず、正確に書き手の論理をとらえながら読みを深めることができない様相が見られる。
 - (2) 単元について
近年、プレゼンテーションする力の重要性がしきりに言われるようになってきた。社会や風潮の変化にもなあって、根拠を挙げて自分の意見を明確に示し、理解してもらうことは、社会で活躍していく上で欠かすことができないものになった。そういう中であって、多くの中学生は、相手や目的をあまり意識せずに、話したり書いたりする傾向があるのではないだろうか。知識や環境に共通点の多い仲間と話をするのは好きだけれど、多数を相手に公の場で話をする際は、自分の考えていることや気持ちを明確に伝えることができない。独りよがりな論理で話したり書いたりして誤解が生じることもある。相手に納得してもらうために、説得力のある内容や表現効果を考えながら自分の意見を明確に伝えていく力を培っていくことは、社会の中で自分を生かし、能力を十分に発揮していく上でも必要だろう。
説明的な文章（特に論説文）は、読み手の関心を喚起しつつ、専門的な知識やそれを踏まえた主張をわかりやすく筋道立てて書いた文章であり、随所に説得力のある文章にするための工夫が施されている。そうした筆者の工夫を学ぶことは、生徒たちが、説得力のある話や文章を構成する上で必ず役立つものになるはずである。
本単元で用いる文章は、「生き物はつながりの中に」「モアイは語る」（平成14年度版光村図書）「モアイは語る」（平成18年版光村図書）の三つである。「生き物はつながりの中に」は小学校六年生の教科書に掲載されていて、論説文の形をもつ。生き物とロボットを対比させながら、生命の大切さを訴える文章で、主張とその他の段落のつながりが比較的容易に見

渡せ、段落相互のかかわりについて考えるのに適した学習材だと考える。

「モアイは語る」は、人間の行動が自然環境に及ぼす影響について述べた文章で、筆者の思考の過程がわかりやすく記された、明快な展開の文章であるが、平成14年度版の文章と平成18年度版の文章では、いくつかの違いが見られる。この二つの文章を比較し、平成18年度版の文章に変更した筆者の意図や表現上の効果を考えていくことが学習の中心となる。これによって、「書き手の論の進め方や説得力をもたせるための工夫を理解し、自分の表現に役立てることができる」という本単元のねらいに迫ることができ、実社会で生きて働く言葉の力を育成することにもつながっていくと考える。

1月に予定している「言葉の力」の学習の際には、本単元で習得した力を生かし、言葉と人間とのかかわりについて意見文を書く予定である。

(3)「研究の視点」について

①総合的な学習の時間のかかわらせた単元計画（学習意欲を高めるための導入の工夫）

本校では、総合的な学習の時間に調べたことや学んだことをプレゼンテーションする機会を設けている。生徒たちが1年生のときに行った発表では、自分の調べたことや考えを十分に伝えることができず苦労していた。論理に飛躍があったり、具体的な根拠がなかったりやや強引に結論に結び付けているように感じられる発表もあった。発表後の自己評価からは、比較的専門性の高い内容をかみ砕いてわかりやすく伝えたり興味深い内容にしたりすることは簡単ではないことを実感した生徒もいたことがわかった。そこで本単元では、導入で総合的な学習の時間とのかかわりをもたせ、自分の表現力を評価し、自分に不足している力を意識させるとともに、本単元で学んだことが総合的な学習の時間の活動に生きるようにしたいと思う。そうすることで、わかりやすく伝えるための工夫や配慮を知りたいという意欲をもつことを期待している。[必要感]

②個々の意見が生きるグループ学習（学び合い、高め合いの場の工夫）

第2次、第3次には、3、4人の小グループによる学習を計画している。グループ学習は、意見の妥当性を検証したり、自分とは違う見方・考え方に気付いたりするために行う。その際、自他の考えを広めたり深めたりする場として生徒全員が認識し、一人一人の考えを大切に扱うように配慮したい。自分の意見が話し合いに生かされていることを実感することができれば、生徒たちの学習意欲が一層高まると考えた。[受容感]

③既習内容を生かしたゴールの設定（成就感や満足感をもたせる「まとめる」場の工夫）

単元のゴールとして、三つの説明的な文章の学習を通して学んだこと（段落の構成や役割、結論や主張までの流れ、具体例の提示の仕方、叙述、接続語の使い方等）をもとにして、「説得力のある発表」の条件をグループごとにまとめさせる。その条件は、できるだけ具体的・実用的な形でまとめることとし、国語をはじめとした教科・領域、総合的な学習の時間への活用を促したい。この学習活動は、単元での既習内容の定着を図るとともに、今後の表現活動の際に、全体の構成や説得力の有無を考慮しながら取り組む姿勢に結び付くことが期待できると思う。本単元を、読み手が納得する文章（談話）を書くことができるようになるきっかけにしたい。[満足感]

④筆者の工夫を見つけるための学習活動の工夫

筆者はどのような工夫をしているのかという点を探るために、二つの文章を比べ読みする。一つの文章を読んだだけでは、見付けられないことも、二つを比べ読みすることで気付くこともあるはずだ。読み手の興味を喚起し、自分の言いたいことを裏付けるために筆者が工夫した部分が見えたとき、生徒は学習の成就感を味わうことができるだろう。また、二つの文章を比べ読みすることは、共通点や相違点を明らかにし、個々の文章に対して自分の考えをもつことにつながる。PISA型読解力において重要とされる「批判的思考力」や「評価力」を身に付けることになると思う。